

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Relationship between the Position and Scope of Conjunctions : Focusing on Conjunction Use in Humanities Papers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井伊, 菜穂子, II, Nahoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003690">https://doi.org/10.15084/00003690</a>

## 接続詞の出現位置からみた接続領域の広さの特徴

——人文科学論文の接続詞を対象に——

井伊菜穂子

一橋大学大学院 博士後期課程 / 国立国語研究所 研究系 非常勤研究員

### 要旨

本稿は、人文科学論文で使用された接続詞を対象に、接続詞の出現位置と、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲である接続領域の広さとの関係を論じたものである。分析の結果、以下の三つのことが明らかになった。第一に、接続詞に共通する基本的な特徴として、接続詞が形式段落の冒頭で使用された場合のほうが、内部や末尾で使用された場合よりも、接続領域が広い傾向があること。第二に、前後を対称的に結びつける並列・対比の接続詞は、前後の接続領域が広い場合は段落冒頭で、接続領域が狭い場合は段落内部あるいは末尾で使用される傾向があり、出現位置による接続領域の広狭が二極化していること。第三に、前後が非対称的な構造になる順接・逆接・換言・結論の接続詞は、段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も前件の接続領域が広い傾向があることである\*。

**キーワード**：接続表現、機能領域、段落、文段、内部構造

### 1. はじめに

本稿は、形式段落内の接続詞の出現位置によって、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲の広さにどのような特徴が見られるかを論じたものである。

接続詞は、主に文頭で使用され、先行文脈の内容を受け、後続文脈の展開の方向性を予告する表現である。文頭で使用された場合、直前直後の文を結びつけるだけでなく、複数の文や段落のような広い範囲を結びつけることもあり、文章構造と密接に関わる表現である。

接続詞が広い範囲を結びつける場合があることについては、文章構造との関連から読解教育や作文教育研究において注目されることが多い(砂川 2015, 高城 2019, 董 2020 など)。書き手や読み手が文章を段落レベル、あるいは文章構造レベルで書いたり読んだりしている実態を測るために、接続詞が文章の中でどれくらいの範囲の文脈を結びつけているかが指標にされている。

しかし、教育現場から接続詞研究に目を移すと、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲については議論の余地が多く残されている。例えば、接続詞の種類によって結びつける文脈の範囲の広さにある程度の傾向が見られることや、結びつける範囲の広さは文章のジャンルによっても異なることは石黒ほか(2009)によって明らかにされているが、同じ接続詞がどのような場合に広い範囲を結びつけやすく、どのような場合に狭い範囲を結びつけやすいのかについては明らかにされていない。これが明らかになれば、文章における接続詞の働きをより正確に記述することが

\*本研究は日本語学会 2019 年度秋季大会における口頭発表「接続詞『また』の機能領域の広さと対称性—『さらに』『一方』と比較して—」(井伊 2019)の一部をもとに加筆・修正したものである。

でき、作文教育や読解教育のための基礎資料の一つにもなるのではないか。

そこで、本稿では、接続詞が形式段落内のどのような位置（冒頭・内部・末尾）で使用されているかに着目し、接続詞の出現位置によって意味的に結びつける文脈の範囲の広さにどのような特徴があるかを明らかにする。なお、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲を表す用語は、「機能領域」や「接続範囲」など先行研究によってさまざまであるが、本稿では「連接領域」という用語を用いる。これは、井伊（2020）で述べたように、「機能領域」の「機能」という用語は言語学で一般的に使用される「機能（function）」とは異なっていること、また、接続詞の性質を論じるときに欠かせない「連接関係」（市川 1978）との名称の一貫性を考慮したためである。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

### 2.1 形式段落を指標とする意義

本稿では接続詞の出現位置として形式段落を指標にするが、形式段落は研究対象としての信頼性を疑われることも多い。そこで、まずは出現位置として形式段落に着目する意義を述べたい。

そもそも段落は、形式上の段落と内容上の段落とで大きく2種に分けることができる。塚原（1966）は、段落を「修辭的段落」と「論理的段落」に分けた上で、「修辭的段落」と「論理的段落」は「一致することもあるけれども、また、一致しないことも少なくない」と述べている。ここで言う「修辭的段落」は、改行一字下げで示される形式上のまとまりであり、いわゆる形式段落にあたる。一方、「論理的段落」は、改行の有無によらない内容上のまとまりであり、「文段<sup>1</sup>」に相当すると考えられる。

この2種の段落のうち形式段落については、恣意的な区分であり、客観的な言語単位として分析するのは困難であるという批判的な指摘がなされることも多い（金岡 1983、塚原 1966、市川 1978）。一方で、形式段落をどこに設けるかは全くの自由というわけではなく、多くの人が段落を置く傾向がある箇所、あるいは置かない傾向がある箇所があることも明らかになっている。永野（1969）では、ある論文の一節から改行を取り除いたものを対象に、「自分が書き手だったら、どこに段落の切れ目を置か（改行するか）」を判断する実験を行ったところ、全ての段落の切れ目を原文通りに判断した被験者はいなかった一方で、多くの被験者が段落の切れ目だと判断した箇所と、切れ目と判断しなかった箇所があったことを報告している。佐久間（1984）においても、『朝日新聞』の「天声人語」の文章を調査文とし、段落意識の調査を行ったところ、「原文の段落と全く同じ指摘をした読み手は一人もいなかった」一方で、「読み手相互には同一の区分をする者もあり、かなりの客観的な段落区分の傾向が認められた」と述べている。さらに永野（1986）においても、「切れめとして改行されるからには、改行されるだけの内容（意味）上の理由があるはずである」という指摘がある。このように、形式段落は恣意的な部分がありつつも、一定の傾向があることも確認されている。形式段落は全くのでたらめで改行されているわけではなく、その根本には書き手が判断した意味上の理由が反映されているのではないだろうか。

<sup>1</sup> 文段について市川（1978: 126）では、「文段とは、一般的に、文章の内部の文集（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である」と定義している。

以上から、本稿では形式段落を指標とすることに意義があると考え、形式段落内の接続詞の出現位置に着目する。

## 2.2 接続詞の接続領域に関する先行研究

接続詞の接続領域に関する研究は、数は少ないものの近年徐々に増加してきている。

研究の皮切りとなったのは、塚原（1968）と塚原（1970）である。塚原（1968）は「接続詞の接続機能が、荷担する範囲」を接続詞の「機能領域」とし、機能領域の研究の必要性を説いている。続く塚原（1970）では、機能領域が「形態的な機能領域」と「意味的な機能領域」の二つに分けて論じられ、その後の研究の基盤となっている。

接続詞の接続領域について実証的な研究を行ったのが、石黒（2001）と石黒ほか（2009）である。石黒（2001）は、換言の接続詞「すなわち」「つまり」「要するに」の特徴を意味的側面と形態的側面から論じ、とくに形態的側面として、接続詞の前後の接続単位が語句、節、文・段落のいずれにあたるかを分析した論文である。分析の結果、「すなわち」は小さい単位、「要するに」は大きい単位を結びつけやすく、「つまり」はその中間の特徴を持つことを明らかにしており、同じ換言の接続詞としてひとくくりになされやすい接続詞でも、形式によって接続単位の大さきの傾向に違いがあることを明らかにしている。ただし、ここで明らかにされているのは語句、節、文・段落のうちどの単位を結びつけやすいかであり、具体的にいくつの文や節を結びつけているかまでは言及されていない。

石黒ほか（2009）は、塚原（1970）が指摘した2種の機能領域のうち、「意味的な機能領域」について実証的な研究を行った論文である。同論文では、「あるいは」「したがって」「たとえば」「一方」の機能領域の広さについて、具体的な文数・節数を測った上でその傾向を分析した結果、「全体としては、『あるいは』は前項・後項ともいずれも狭い機能領域を、『したがって』は前項が広く後項が狭い機能領域を、『たとえば』は前項が狭く後項が広い機能領域を、『一方』は前項・後項ともいずれも広い機能領域を、それぞれ有すること」を明らかにしている。さらに、接続詞の種類によって広さにある程度の傾向が見られるものの、文章のジャンルによっても異なること、また同じジャンルでも広い範囲を結びつける用例と狭い範囲を結びつける用例があり、「機能領域が、接続詞によって一律に決まっているわけではなく、文脈によって決まる語用論的性格の強いもの」（石黒ほか2009）であることも指摘している。最後の「文脈によって決まる」という指摘から接続領域の特徴の捉えにくさが窺えるが、接続詞の出現位置を指標とすることで、接続領域の特徴の記述を一步進めることができるのではないかと。

接続領域の研究が増加傾向にある中で、接続領域の認定基準の再考を主張した論文もある。井伊（2020）は、接続領域に関する先行研究の記述や例文を検討し、接続詞の先行文脈と後続文脈について、接続詞が明示する接続関係（順接・逆接など）を単独で構成することができる文か否かという観点から、接続領域を「主領域」と「従属領域」の2種に分けることを主張している。本稿では井伊（2020）の基準を用いて接続領域の認定を行うため、認定基準については3.2で再度詳述する。

### 2.3 接続詞の出現位置に関する先行研究

文章中の接続詞の出現位置については、文章全体の中の特定の位置（論文の中の「緒言」など）に着目した研究と、形式段落内の位置に着目した研究がある。ここでは本稿との関連が深い後者の研究についてとりあげる。

佐久間（1974）では、新聞社説の中の接続語句が、「段落区分箇所」（改行一字下げの表記が目安となる形式段落の切れ目の箇所）と、「段落内部箇所」（改行箇所にある一文以外の部分）それぞれにおいてどれくらい使用されているかを分析し、どの接続類型に属する接続語句についても「段落区分箇所」より「段落内部箇所」の方が出現率が高いことを明らかにしている。その上で、出現数上位の逆接型と添加型を比較すると、添加型は「一種の文脈転換の機能」を果たすことが多く、より「段落区分箇所」での使用が多い傾向があること、逆接型は前件と後件の論理的な密着度が強い表現であるため、「段落内部箇所」での使用が多いことを指摘している。

尾崎（2022）は、小学校国語教科書から45編の説明的文章を選定し、そこで使用されている接続表現の形式段落における使用位置（段落冒頭、段落末尾、一文段落、その他の位置）の特徴を分析している。その結果、論理的関係を表示する接続表現と加算的關係を表示する接続表現は、段落末尾で使用が多く一文段落で少ない傾向があり、とくに論理的関係を表示する接続表現は段落冒頭での使用も少ないこと、一方で、話題の展開を表示する接続表現は、段落冒頭と一文段落で用いられる傾向が強いことが明らかにされている。

このように、接続詞の出現位置について興味深い結果が明らかにされているが、接続領域の広さとの関連については分析されていない。接続詞と段落との関係を明らかにする以上、個々の接続詞が使用される位置によってどれくらいの範囲の文脈を結びつけているのか、それが形式段落とどのような関係にあるかについても明らかにする必要があるだろう。

### 2.4 本研究の位置づけ

以上で述べたように、接続詞の接続領域の広さについては、接続詞の種類や文章ジャンルによってある程度の傾向があることはわかっているが、同じ接続詞がどのような場合に広い範囲を結びつけたり狭い範囲を結びつけたりするのかについてはより詳細な記述を行う必要がある。また、接続詞は段落内の出現位置に一定の傾向があることが明らかになっているが、段落も接続領域も意味的なまとまりであることを考えると、接続詞の出現位置が接続領域の広さにも深く関わっていることが予想される。

そこで、本稿では形式段落を指標に、接続詞の出現位置ごとの接続領域の広さの特徴を明らかにする。さらに、出現位置ごとに接続領域の広さの特徴が見られる要因を明らかにするため、接続領域内の内部構造にも着目する。以下が本稿のリサーチクエスション（RQ）である。

RQ1：接続詞の出現位置ごとの接続領域の広さにどのような特徴があるか

RQ2：RQ1で得られた特徴と接続領域内の内部構造にどのような関係があるか

### 3. 研究方法

本稿では、人文科学論文で使用されている接続詞を対象に接続領域の認定を行った上で、その特徴を分析する。3.1 では分析対象の材料文や接続詞について説明し、3.2 で接続領域の認定方法について、3.3 では接続領域の認定結果の一致度について述べる。

#### 3.1 分析対象

本稿が用いた材料文は、人文科学領域の学会誌に掲載されている研究論文 60 本の本文である<sup>2</sup>。接続領域の分析にあたり、一定の長さがあり、論理性の高いジャンルの文章を選んだ。

学会誌は、佐藤ほか（2013）を参考に、日本語学、日本語教育学、日本文学の分野を代表する学会誌『日本語の研究』『日本語教育』『日本文学』『日本近代文学』を対象とした。各学会誌について、2017年12月からさかのぼって直近50本の論文から無作為抽出法で20本ずつ（日本文学の分野は学会誌が2種あるため各10本）論文を抽出し、計60本を材料文とした。論文の筆者は重複しておらず、全員日本語母語話者である。

分析対象は、表1の13種の接続詞であり、括弧内の語も対象に含んでいる。接続詞の種類と接続関係の名称は、多くの種類の接続詞が網羅的に類型化された石黒（2016）を参考にし、対象の接続詞の選定は、①材料文の中で出現頻度が高いこと、②特定の接続関係の類型に偏らないこと、③各類型にできるだけ複数の接続詞を含むことを方針とした。なお、接続詞は文頭で使用されている用例のみ対象とし、文中や二重使用で後接している用例、副詞あるいは指示詞として使用されている用例は対象から除外している。

表1 分析対象の接続詞

接続関係		接続詞
大分類	中分類	
論理	順接	そこで、したがって、そのため（そのために）
	逆接	しかし（しかしながら）、だが
整理	並列	また、そして、さらに（さらには）
	対比	一方（一方で、その一方、その一方で）、これに対し（これに対して、それに対し、それに対して、対して）
理解	換言	つまり、すなわち
展開	結論	このように

#### 3.2 接続領域の認定方法

次に、接続領域の認定方法について述べる。本稿では、先行研究の記述や課題を踏まえて提案された井伊（2020）における接続領域の認定基準を用いた。井伊（2020）では、接続領域が「主領域」と「従属領域」に下位分類され、以下のように定義されている。

<sup>2</sup> 本文を対象としたため、見出し、キーワード、図表、例文、本文から独立した引用文や箇条書き箇所、注釈、参考文献、謝辞は対象から除外している。また、節の見出しや形式段落は削除せずに、原文の表記のまま使用している。



主領域：接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうる文脈の範囲

従属領域：接続詞が明示する接続関係を主領域と併せたまとまりとしてのみ構成しうる文脈の範囲 (井伊 2020)

それぞれ例文に沿って説明すると、以下の例文(1)では、文③に接続詞「また」が使用されている。下線部の文①と文③は、その文だけで前件あるいは後件と並列関係をなしており、主領域と認定される。一方、点線部の文②と文④は、それぞれ文①と文③を補う内容の文であり、その文だけでは前件あるいは後件と並列関係にあるとは考えにくい。しかし、文②は文①と、文④は文③と併せたまとまりとして見ると並列関係を構成しているため、従属領域と認定される。したがって、接続詞「また」の接続領域は、前件が文①から文②まで、後件が文③から文④までとなる。以下、例文では接続領域を【 】で括り、キーとなる接続詞は囲み線で示す。また、原文に改行がある場合、引用する際も改行一字下げで示す。

- (1) 【①表8から固定的連綿である「とん」「なん」「はん」は、いずれも特定の地域のみに見られるということではなく、現在の東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州と広い地域で確認することができた。②このことから、「とん」「なん」「はん」といった固定的連綿は、地域差に左右されない書記方法ということである。】

【③【また】、性別という観点でみると男四五〇例に対し、女八六例という結果が得られた。

- ④当時の書記層全体を把握できないことから男女どちらに有用な書記方法とはいえないので、ここでは男女ともにみられるものであるという指摘にとどめたい。 (堀川 2015)

上記の基準に従い、筆者を含む5名の日本語母語話者が独立して認定作業を行った<sup>3</sup>。5名全員が日本語学・日本語教育学・日本文学のいずれかを専攻する現役大学院生あるいは修士生である。また、認定は句点で区切った文単位で行い、「A. また、B. さらに、C.」のように接続詞が三つ以上の項目を並列している場合は、接続詞の直前・直後の項目のみ認定対象とした。

以降では、主領域と従属領域を合わせた全体を接続領域と呼ぶ。これは従属領域も含んだ全体で前後の接続関係(例文1であれば並列関係)を構成しているためである。

### 3.3 接続領域の認定結果

前節の基準に基づいて接続領域を認定した結果、認定者5名の認定結果が全て一致する用例もあれば一致しない用例も見られた。一致人数ごとの用例数をまとめたものが表2である。本稿では、一致人数が2名以下の用例は認定結果を一つに絞ることができないため分析対象外とし、前件・後件ともに一致人数が3名以上の用例のみ分析対象とする。

<sup>3</sup> 接続領域の認定について、各用例に対して5名の認定者で認定したが、「また」「さらに」「一方」の接続領域の認定者5名と、そのほか10種の認定者5名は異なる人物である。13種全て同じ認定者で統一するのが最善であるが、認定者の負担を軽減するため分担する必要があること、実際の分析では5名中3名以上の一致がとれたデータのみ分析対象とする方法をとっている(3.3参照)ことから、認定者が異なっても大きな問題は生じないと考え、この方法を採用した。

表2 接続領域の認定結果の一致人数ごとの用例数と割合

接続詞	前件			後件		
	3名以上	2名以下	合計	3名以上	2名以下	合計
そこで	62 (80.5)	15 (19.5)	77	74 (96.1)	3 (3.9)	77
したがって	45 (81.8)	10 (18.2)	55	55 (100.0)	0 (0.0)	55
そのため	44 (89.8)	5 (10.2)	49	49 (100.0)	0 (0.0)	49
しかし	329 (90.6)	34 (9.4)	363	345 (95.0)	18 (5.0)	363
だが	57 (95.0)	3 (5.0)	60	50 (83.3)	10 (16.7)	60
また	354 (91.9)	31 (8.1)	385	359 (93.2)	26 (6.8)	385
そして	159 (94.1)	10 (5.9)	169	163 (96.4)	6 (3.6)	169
さらに	95 (95.0)	5 (5.0)	100	89 (89.0)	11 (11.0)	100
一方	123 (94.6)	7 (5.4)	130	118 (90.8)	12 (9.2)	130
これに対し	24 (92.3)	2 (7.7)	26	23 (88.5)	3 (11.5)	26
つまり	113 (80.1)	28 (19.9)	141	141 (100.0)	0 (0.0)	141
すなわち	46 (92.0)	4 (8.0)	50	50 (100.0)	0 (0.0)	50
このように	70 (64.2)	39 (35.8)	109	109 (100.0)	0 (0.0)	109

## 4. 分析結果と考察

### 4.1 接続詞の出現位置と接続領域の広さ

接続詞の接続領域の広さには、接続詞の出現位置ごとにどのような傾向があるだろうか。ここでは、接続詞の出現位置を形式段落冒頭・内部・末尾の3箇所に分けた上で、それぞれの出現位置における接続領域の広さの特徴を分析する。「段落冒頭」は形式段落の1文目、「段落末尾」は形式段落の最後の文、「段落内部」は形式段落の1文目と最後の文以外の文である。

以下の表3は、接続詞の出現位置ごとに該当する接続詞の用例数を集計したものである。3.3で述べた通り、前件・後件ともに一致人数が3名以上の用例のみ対象としているため、前掲の表2よりも分析対象の用例数が少なくなっている。

表3 出現位置ごとの接続詞の用例数

接続詞	段落冒頭	段落内部	段落末尾	合計
そこで	10	30	20	60
したがって	3	23	19	45
そのため	1	26	17	44
しかし	37	211	63	311
だが	6	27	14	47
また	57	178	97	332
そして	19	81	55	155
さらに	16	45	23	84
一方	32	64	17	113
これに対し	7	13	3	23
つまり	5	74	34	113
すなわち	3	26	17	46
このように	23	21	26	70



表3で示した用例について、接続領域内の文数の分布を箱ひげ図で表したものが、図1～3である。図1は出現位置が段落冒頭の場合、図2は段落内部の場合、図3は段落末尾の場合であり、それぞれ左図が前件を、右図が後件を表している。X軸は文数、図中の太線は中央値、点は平均値である。なお、図1の段落冒頭の図には用例数が1件しかない「そのため」が含まれ、この用例のみでデータの分布を見るのは不適切であるが、ここでは三つの図を比較して見やすくするために削除せず残している。データの処理と分析は、R (ver.4.0.2) を使用している。

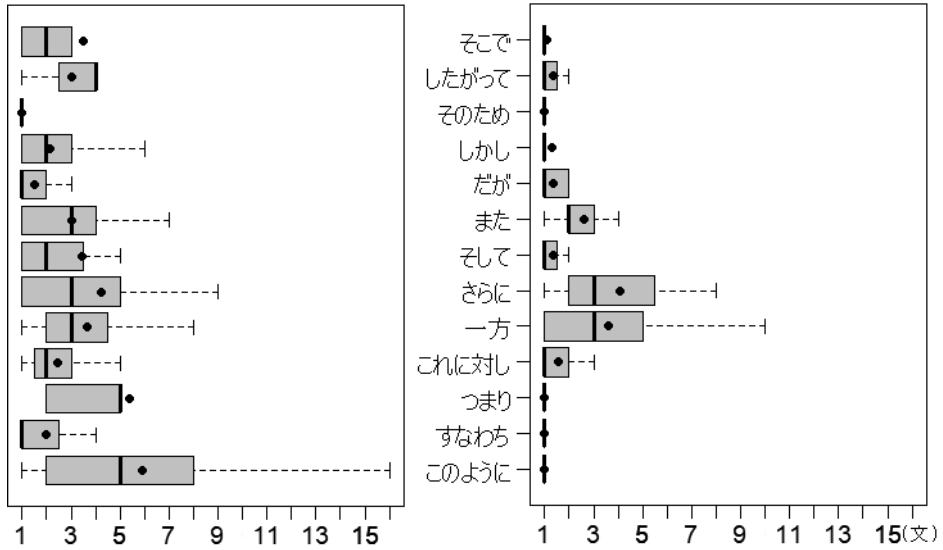


図1 出現位置が段落冒頭の場合の接続領域内の文数（左が前件，右が後件）

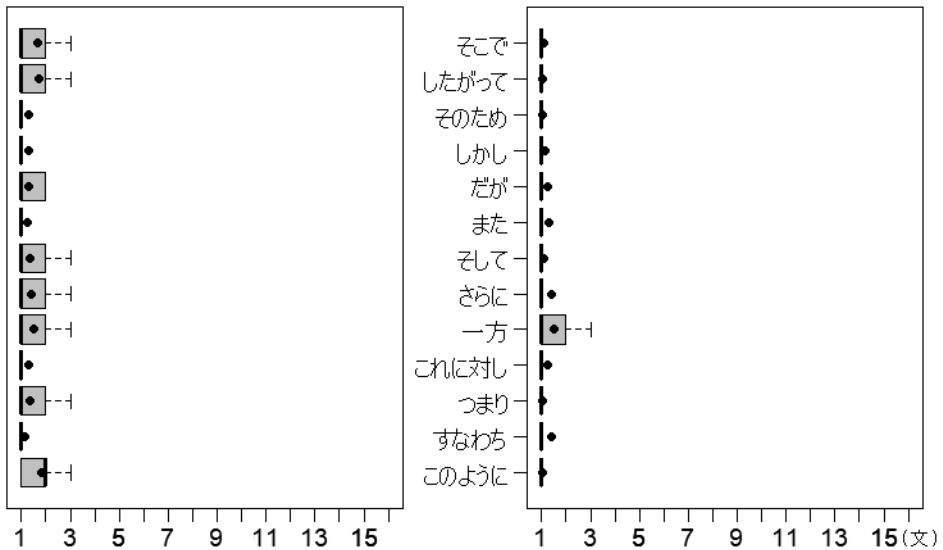


図2 出現位置が段落内部の場合の接続領域内の文数（左が前件，右が後件）

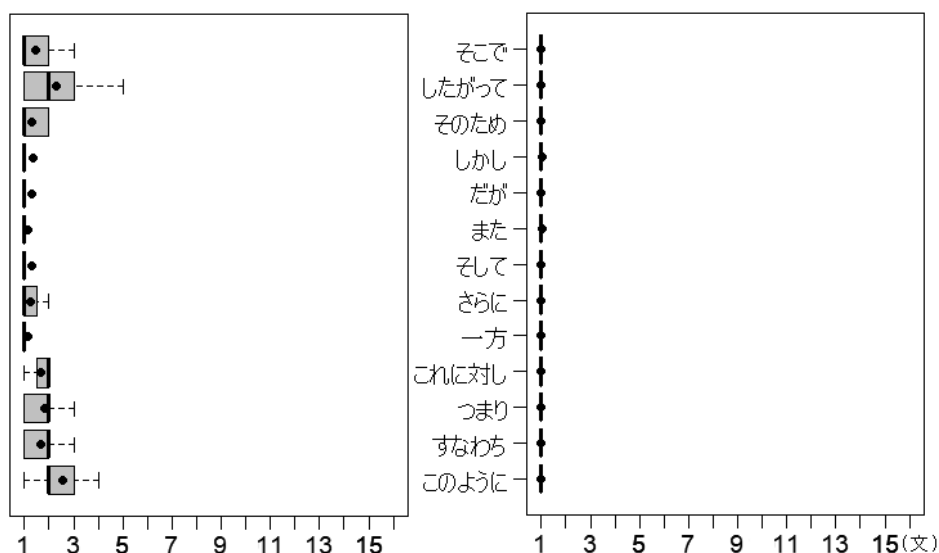


図3 出現位置が段落末尾の場合の接続領域内の文数（左が前件，右が後件）

図1～3を見ると，前件の接続領域の広さについて二つの特徴が見られる。

一つは，どの接続詞についても，接続詞が段落冒頭で使用された場合のほうが，段落内部や段落末尾で使用された場合よりも，前件の接続領域が広い傾向があるということである。例えば，「そこで」を見ると，段落冒頭（図1）で使用された場合は中央値が2文，第三四分位数が3文と広い範囲に及ぶ用例が多く見られるのに対し，段落内部（図2）や段落末尾（図3）の場合は中央値が1文であり，少なくとも半数の用例が直前の1文のみを結びつけている。その他の接続詞も同様に，段落冒頭における前件の接続領域が広い傾向がある。

前件のもう一つの特徴は，接続詞によって，段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向がある接続詞と，段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も前件が広い傾向がある接続詞とに分かれるということである。前者の段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向があるのが，「そこで」「しかし」「また」「そして」「さらに」「一方」である。いずれも段落冒頭における前件の中央値が2文以上である一方で，段落内部や末尾においては中央値が1文であり，狭い範囲に収まっている。後者の段落冒頭だけでなく段落末尾においても前件が広い傾向があるのが，「したがって」「これに対し」「つまり」「すなわち」「このように」であり，これらは段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合にも中央値が2文以上と複数文を結びつける傾向がある（「すなわち」の段落冒頭を除く）。なかでも「したがって」と「このように」は段落末尾での前件の平均値がそれぞれ2.32文，2.58文であり，特に広い傾向が見られる。上記のうちいずれのパターンにも当てはまらない接続詞が，「そのため」と「だが」である。これらはどの位置で使用されても中央値が1文となっており，出現位置に関わらず前件が狭いという特徴を持っている。

後件の接続領域についても二つの特徴が見られた。

一つは、段落冒頭でのみ後件の接続領域が広い傾向がある接続詞と、段落冒頭も含めどの出現位置でも後件が1文に収まる傾向がある接続詞とに分かれるということである。具体的には、「また」「さらに」「一方」は段落冒頭での中央値が2文以上であり、後件が広い範囲に及ぶ用例が見られるが、それ以外の接続詞は出現位置に関わらず、ほとんどの用例が1文に収まっている。

後件のもう一つの特徴は、段落末尾で接続詞が使用された場合、後件が形式段落を超えた範囲に及ぶことは少なく、形式段落内に収まる傾向があるということである。図3（段落末尾の図）を見ると、後件の接続領域がどの接続詞においても1文に収まっていることがわかる。

以上、箱ひげ図から読みとれる特徴を述べたが、統計的な検証によってこの主張を補えるだろうか。1文が主である後件は除き、出現位置ごとの広さの特徴が複雑な前件に絞って検証を行う。

13種の接続詞について、出現位置ごとの前件の接続領域の広さに統計的な差があるかを検証するため、3群以上における中央値の差を検定するクラスカル・ウォリス検定を行った。その結果が表4である<sup>4</sup>。帰無仮説は3群間の中央値に差が無いことである。なお、「したがって」「そのため」「つまり」「すなわち」の段落冒頭、「これに対し」の段落末尾における用例数は5例以下であり、クラスカル・ウォリス検定を行うには不十分な用例数である。そこで、この4形式については別途検定を行い、「したがって」「そのため」「つまり」「すなわち」は段落内部と段落末尾、「これに対し」は段落冒頭と段落内部の間に統計的な差があるかを、2群間における中央値の差を検定するマン・ホイットニーのU検定によって検証した<sup>5</sup>。その結果が表5である。表内の「-」で示した箇所は、用例数が5例以下であり検定の対象としていない箇所である。

<sup>4</sup> 本稿のデータは、最小値である1文が最も頻度が高く、右に裾の長いL字型分布であり、対数変換をしても正規分布に近い形にはならない。そのため、ノンパラメトリック検定を使用した。

<sup>5</sup> 本来、クラスカル・ウォリス検定を小標本に適用する場合は、正確確率表を用いるのが最善である。しかし、正確確率表は限定的な群数、サンプルサイズにしか対応されておらず（名取2014）、本稿の「つまり」のように3群の用例数がそれぞれ「5」「74」「34」のような大きい用例数を含む場合に適応が難しい。そこで、用例数が5以下の群が含まれる場合は、その群を除いた残りの2群のみをマン・ホイットニーのU検定によって比較することにした。

表4 出現位置ごとの前件の接続領域の広さの差の検定結果 (3群間の比較)

接続詞	段落冒頭			段落内部			段落末尾			p値	効果量 (r)
	用例数	中央値	平均値	用例数	中央値	平均値	用例数	中央値	平均値		
そこで	10	2.00	3.50	30	1.00	1.67	20	1.00	1.45	.06 †	.24
したがって	3	4.00	3.00	23	1.00	1.74	19	2.00	2.32	.14	.22
そのため	1	1.00	1.00	26	1.00	1.31	17	1.00	1.29	.62	.07
しかし	37	2.00	2.14	211	1.00	1.28	63	1.00	1.35	<.05*	.23
だが	6	1.00	1.50	27	1.00	1.30	14	1.00	1.29	.29	.15
また	57	3.00	3.04	178	1.00	1.23	97	1.00	1.12	<.05*	.45
そして	19	2.00	3.42	81	1.00	1.33	55	1.00	1.27	<.05*	.26
さらに	16	3.00	4.25	45	1.00	1.40	23	1.00	1.26	<.05*	.41
一方	32	3.00	3.66	64	1.00	1.52	17	1.00	1.12	<.05*	.52
これに対し	7	2.00	2.43	13	1.00	1.31	3	2.00	1.67	.07 †	.38
つまり	5	5.00	5.40	74	1.00	1.37	34	2.00	1.79	<.05*	.39
すなわち	3	1.00	2.00	26	1.00	1.15	17	2.00	1.65	<.05*	.32
このように	23	5.00	5.91	21	2.00	1.81	26	2.00	2.58	<.05*	.41

†  $p < .10$  \*  $p < .05$ 

表5 出現位置ごとの前件の接続領域の広さの差の検定結果 (2群間の比較)

接続詞	段落冒頭			段落内部			段落末尾			p値	効果量 (r)
	用例数	中央値	平均値	用例数	中央値	平均値	用例数	中央値	平均値		
したがって	-	-	-	23	1.00	1.74	19	2.00	2.32	.09 †	.26
そのため	-	-	-	26	1.00	1.31	17	1.00	1.29	.44	.12
これに対し	7	2.00	2.43	13	1.00	1.31	-	-	-	<.05*	.48
つまり	-	-	-	74	1.00	1.37	34	2.00	1.79	<.05*	.28
すなわち	-	-	-	26	1.00	1.15	17	2.00	1.65	<.05*	.39

†  $p < .10$  \*  $p < .05$ 

まず、3群間で比較した表4の接続詞から見ていくと、「しかし」「また」「そして」「さらに」「一方」「このように」は、5%水準で出現位置ごとの前件の接続領域の広さに有意差が見られ、帰無仮説が棄却された ( $p < .05$ )。これらの接続詞は、段落冒頭・内部・末尾のいずれかの組み合わせの間に有意な差があるということである。「そこで」は有意傾向のみ観察され、「だが」は有意差が見られなかった。

次に、2群間で比較を行った表5の接続詞を見ると、「これに対し」は段落冒頭と段落内部における前件の接続領域の広さの間に、「つまり」「すなわち」は段落内部と段落末尾における前件の接続領域の広さの間に5%水準で有意差が見られ ( $p < .05$ )、「したがって」は段落内部と段落末尾における前件の接続領域の広さの間に有意傾向が観察された。「そのため」については段落内部と段落末尾の間に有意差は見られず、「だが」と同様、出現位置ごとの広さに差が見られない結果となった。

有意差が見られた接続詞について、ボンフェローニ法による多重比較を行った結果が表6である。参考のために有意傾向が見られた「そこで」についても記載している。

表6 出現位置ごとの前件の接続領域の広さの差の多重比較の結果

比較箇所	そこで		しかし		また		そして	
	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )
段落冒頭と段落内部	.096	.264	<.016*	.257	<.016*	.536	<.016*	.280
段落冒頭と段落末尾	.098	.302	<.016*	.305	<.016*	.662	<.016*	.360
段落内部と段落末尾	.988	.002	.895	.008	.596	.032	.819	.020
比較箇所	さらに		一方		このように			
	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )	<i>p</i> 値	効果量 ( <i>r</i> )		
段落冒頭と段落内部	<.016*	.441	<.016*	.481	<.016*	.516		
段落冒頭と段落末尾	<.016*	.516	<.016*	.671	.058	.271		
段落内部と段落末尾	.970	.005	.306	.114	.267	.162		

†  $p < .033$  \*  $p < .016$ 

多重比較の結果から、段落冒頭と段落内部、段落冒頭と段落末尾の間で有意差が見られた接続詞が、「しかし」「また」「そして」「さらに」「一方」である ( $p < .016$ )<sup>6</sup>。これは段落冒頭で使用された場合のほうが段落内部や段落末尾で使用された場合よりも前件の接続領域が広く、段落内部と段落末尾との間には統計的な差はないという結果であり、先に述べた段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向がある接続詞であるという指摘を補う結果だと考えられる。効果量を見ても、いずれも段落冒頭と段落末尾の間の比較については効果量中あるいは大となっている。なお、「そこで」についても、段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向があることを箱ひげ図から指摘したが、多重比較の結果からは出現位置ごとの有意傾向は観察されなかった。

次に、段落冒頭と段落内部の間のみ有意差が見られたのが、「このように」である。段落末尾は段落冒頭とも段落内部とも有意差が無く、中間的な広さにあたると考えられることから、先述した段落冒頭だけでなく段落末尾においても前件が広い傾向があるという特徴を補う結果であると言える。段落冒頭と段落内部の比較については効果量も大きくなっている。

以上の結果をもとに、出現位置ごとの前件の接続領域の広さの特徴によって接続詞を分類したものが表7である。なお、「そこで」と「したがって」については箱ひげ図から観察された傾向をもとに分類しているが、表4で示したように検定の結果はあくまで有意傾向であり、効果量も低くなっていることから、今後検証を重ねる必要がある接続詞である。また、段落冒頭あるいは段落末尾の用例数が3例以下と少数であった接続詞も、今後用例数を増やしたうえで改めて検証する必要がある。

<sup>6</sup> 3群間で検定を繰り返すことにより有意差が現れやすくなるのを避けるため、 $0.05 \div 3 = 0.016$ を補正後の有意水準、 $0.1 \div 3 = 0.033$ を補正後の有意傾向の判断基準とした。

表7 出現位置ごとの前件の接続領域の広さの特徴と各特徴に該当する接続詞

出現位置ごとの接続領域の広さの特徴	該当する接続詞
段落冒頭で使用された場合のみ 前件の接続領域が広くなりやすい接続詞	しかし、また、そして、さらに、一方、そこで
段落冒頭だけでなく段落末尾においても 前件の接続領域が広くなりやすい接続詞	これに対し、つまり、すなわち、このように、したがって
出現位置ごとの前件の接続領域の広さの差が 小さい接続詞	そのため、だが

ここまで、箱ひげ図から見た傾向と統計による分析から、前件について二つの特徴を述べてきた。それぞれの特徴について考察していきたい。

まず、どの接続詞にも見られた特徴として、接続詞が段落冒頭で使用された場合のほうが段落内部や末尾で使用された場合よりも接続領域が広い傾向が見られた。これは、接続詞の接続領域が広い場合、接続領域内に小さな意味的まとまりを含んでいる可能性が高く、上位階層である接続詞の箇所で形式段落の切れ目を作ることによって、文章を立体的に理解しやすくしているのだと考えられる。接続領域の広さが、形式段落の生成に関わっていると言える。

ここで、段落冒頭で使用されている接続詞の前件が、直前の形式段落全体を結びつけているか（前件の1文目が直前の形式段落の1文目にあたるか、あるいは直前の形式段落を超えるか）、それとも直前の形式段落の途中から始まるかについて用例を確認したところ、段落冒頭の接続詞219例中134例（61.2%）が直前の形式段落全体を結びつけていることがわかった。これは形式段落の冒頭で接続詞が使用された場合、約6割の用例が段落単位で前件を結びつけているということであり、接続詞の接続領域の広さが形式段落を新たに作るかどうかになんらかの影響していることが窺える。ただし、残りの4割は直前の形式段落の途中から接続領域が始まるということであり、その詳細について今後検討する必要がある。

また、石黒ほか（2009）は、接続詞「一方」が前件・後件ともに接続領域が長い対比と短い対比の両方で使用されているという結果に対して、「機能領域の長短の二極分化がとくに進んだ接続詞のように見うけられる」と指摘しているが、この「二極分化」は接続詞の出現位置によって説明できるのではないだろうか。「一方」は、段落冒頭で使用された場合に接続領域が広く、段落内部や末尾で使用された場合は接続領域が狭い傾向がある接続詞である。これが石黒ほか（2009）において出現位置を分けずに分析した際に、接続領域の広狭の「二極分化」に現れたのだと考えられる。このような「二極分化」の現象は、段落冒頭で顕著に接続領域が広い「また」「そして」「さらに」についても同様のことが起きていると考えられる。

前件についてももう一つ指摘した点が、段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向がある接続詞と、段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も前件が広い傾向がある接続詞に分かれるということである。このような傾向に分かれる要因には、接続領域内の内部構造の特徴が関わっていると考えられるため、次節にて検討する。



#### 4.2 接続詞の接続領域の広さと内部構造

4.1 では接続詞の出現位置と接続領域の広さとの関係について分析し、接続詞によってどの出現位置で接続領域が広くなりやすいかが異なることを見てきた。このような結果が得られた要因を探るため、本節では接続領域内の主領域（3.2 節参照）がどのような位置に現れているかという観点から、接続領域の内部構造の特徴を分析する。

次の表 8 は、前件と後件それぞれの接続領域において、主領域がどの位置にあるかという観点から用例を集計したものである。主領域の位置については、前件あるいは後件の接続領域内の 1 文目に主領域がある場合を「領域冒頭」、最後の文にある場合を「領域末尾」、特定の文が主領域と判断されなかった場合を「なし」、主領域の認定結果が認定者によってばらついており過半数の一致がとれない場合を「不一致」としている。なお、主領域の位置が問題になるのは接続領域が広い用例であるため、前件あるいは後件の接続領域が 2 文以上になる用例のみ対象とした。また、領域冒頭と末尾以外の領域内部に主領域があると認定された例もわずかにあるが、認定者の過半数が一致して領域内部に主領域があるとした用例は存在しないため、表には含んでいない。

表 8 から、前件と後件で主領域の位置の傾向が大きく異なることがわかる。傾向が明確なのは後件であり、どの接続詞も一様に領域冒頭文が主領域となっている。これは、後件の領域冒頭文が接続詞から始まる文であることを考えると、自然な結果だと考えられる<sup>7</sup>。一方、前件の主領域の位置は、接続詞の種類や、同じ接続詞でも文脈によって傾向が異なっている。そこで、以下ではとくに前件の違いに着目しながら述べる。

<sup>7</sup>ただし、なかには領域末尾に主領域があると判定された用例もあること（「また」の後件参照）、また本稿では一致人数が 2 名以下の用例を分析対象外としていることから、全ての用例について後件の領域冒頭文が主領域になるとまでは断言できない。

表8 主領域の位置ごとの用例数

接続詞	前件の主領域の位置					後件の主領域の位置				
	領域 冒頭	領域 末尾	なし	不一致	合計	領域 冒頭	領域 末尾	なし	不一致	合計
そこで	2 (8.3)	5 (20.8)	11 (45.8)	6 (25.0)	24 (100.0)	3 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
したがって	3 (13.6)	4 (18.2)	12 (54.5)	3 (13.6)	22 (100.0)	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
そのため	2 (22.2)	3 (33.3)	3 (33.3)	1 (11.1)	9 (100.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
しかし	10 (13.0)	17 (22.1)	37 (48.1)	13 (16.9)	77 (100.0)	33 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	33 (100.0)
だが	0 (0.0)	3 (27.3)	4 (36.4)	4 (36.4)	11 (100.0)	8 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
また	72 (87.8)	7 (8.5)	0 (0.0)	3 (3.7)	82 (100.0)	75 (96.2)	1 (1.3)	0 (0.0)	2 (2.6)	78 (100.0)
そして	16 (37.2)	4 (9.3)	15 (34.9)	8 (18.6)	43 (100.0)	12 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (100.0)
さらに	26 (89.7)	2 (6.9)	0 (0.0)	1 (3.4)	29 (100.0)	26 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	26 (100.0)
一方	42 (84.0)	7 (14.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	50 (100.0)	43 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	43 (100.0)
これに対し	5 (50.0)	0 (0.0)	3 (30.0)	2 (20.0)	10 (100.0)	6 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)
つまり	2 (4.8)	9 (21.4)	29 (69.0)	2 (4.8)	42 (100.0)	4 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (100.0)
すなわち	0 (0.0)	2 (14.3)	10 (71.4)	2 (14.3)	14 (100.0)	5 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
このように	6 (12.2)	5 (10.2)	36 (73.5)	2 (4.1)	49 (100.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)

(最も割合が高い箇所を下線)

まず、「また」「そして」「さらに」「一方」「これに対し」は前件・後件ともに接続領域内の冒頭文が主領域となる用例が多い。これらの接続詞は、離れた位置にある前件の領域冒頭文と後件の領域冒頭文を接続詞が結びつけており、前後の主領域の位置から見た内部構造の対称性が高い接続詞であると言える。例えば次の例文(2)では、文④に接続詞「一方」があり、前件・後件それぞれの1文目(下線部②④)が主領域、それ以降の文が従属領域(点線部③⑤)という構造になっている。

- (2) ①先行研究では、子どもの体験や家庭での暮らしに関わるやり取りが見られる。【②まず朱(2007: 152)では、煌々とネオンが輝く都会の夜の対極にある、「闇」の価値を考えるという教材文の主題をめぐり、子どもが母語支援者とやり取りする中で、故郷の村で夜に見た不思議な光を思い出し、「闇」の意味を見出していった。③抽象概念(闇)と故郷での生活体験が統合された例である。】【④一方滑川(2010)は、子どもの母親が母語支援者となり、日本人支援者とともに子どもに働きかけ、故郷の町や家業に関わる知識や文

化を教材文の理解に結びつけた。⑤親の参加と家業への着目という点で「知識の資産」  
 (Moll, 2014) の実践に通じる。】 (滑川 2015)

このような特徴を持つ接続詞は、前節の分析において、段落冒頭で使用された場合のみ前件が広い傾向がある接続詞であった<sup>8</sup>。また、前掲の図1を見ると、とくに「また」「さらに」「一方」は前件・後件ともに段落冒頭での接続領域が広い接続詞であり、内部構造の対称性だけでなく広さの対称性も高い接続詞であると言える。これらがいずれも並列の接続詞と対比の接続詞である点も特徴的である。

主領域と従属領域から構成される構造は、文段研究と親和性の高い現象である。上記の内部構造を文段との関連から考えると、前件と後件の主領域はそれぞれ文段における中心文、前後の接続領域はそれぞれの中心文が統括する文段に対応していると考えられる(図4)。前件と後件の主領域が中心文と考えられる理由は、主領域の「接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうる文脈の範囲」という定義から、接続詞が持つとされる外的統括の力が主領域まで及ぶと考えられること、そして、従属領域は主領域を補う内容となるため、接続領域内の内容を端的に表す部分は主領域であると考えられるためである。

図4の構造と前節の出現位置ごとの広さの分析をあわせて考えると、「また」「そして」「さらに」「一方」は、従属領域が含まれ接続領域が広がる場合は形式段落冒頭で使用され、従属領域を含まず接続領域が狭くなる場合は形式段落内部や末尾で使用される傾向があり、前節で述べた接続領域の広さの「二極分化」が起きていると考えられる。

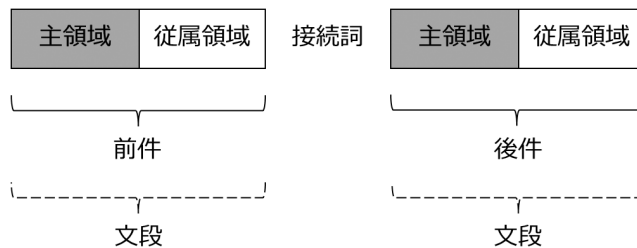


図4 前後が対称的な内部構造になる接続詞の主領域の位置と文段との関係

一方で、「そこで」「したがって」「しかし」「つまり」「すなわち」「このように」はいずれも前件に主領域がなく、後件の領域冒頭文のみに主領域がある用例が多い。例えば、例文(3)では文③に接続詞「したがって」があるが、前件の特定の文を主領域と認定するのは困難だと認定されている。なお、見やすさのために前件の下線は省略している。

- (3) 【①「です」調は、小説の語り方が「語り手-読者」間の呼びかけであることを前景化する。  
 ②このことは、裏を返せば、三人称格で語られる作中人物が、「わたし-あなた」のコミュ

<sup>8</sup>「これに対し」のみ該当しないが、「これに対し」は段落末尾の用例が少なく再検証の必要がある接続詞であるため、ここでは「これに対し」に関する主張は保留する。

ニケーションの圏域外に存在すること（この場にはないこと）を強調することにもつながる（「話題の世界」とはまったく関係なく「です・ます」は使われる）。】【③ したがって】、「わたし-あなた」が、この場にはない第三者についての話題を共有する、という関係性こそが小説冒頭で示される趣向なのであって、物語言説の空間と物語内容の空間とが文末詞「です」によって画然と区別されるのだと言ってもよい。】（永井 2015）

これらは、前後の主領域の位置から見た内部構造の対称性が低い接続詞であり、順接・逆接・換言・結論の接続詞が該当している。また、前節において、段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も前件が広い傾向がある接続詞が多く該当している点が特徴である。

これも文段との関連から考えてみると、後件のみ焦点がある場合が多いことから、前件と後件を合わせた接続領域全体が一つの文段であり、文段の中心文にあたる文が、接続詞の後件にあると考えることができるのではないかと（図 5）。このような内部構造になる接続詞は、後件が狭くなりやすく、従属領域が存在しない場合が多いため、図 5 では従属領域を点線で示している。

図 5 の構造になりやすい接続詞は、先の図 4 の構造のように前件の主領域に従属領域が続くか否かという選択が起りにくく、出現位置が段落冒頭でも段落末尾でも、前件が広くなりやすいという特徴が変わらないのだと考えられる。

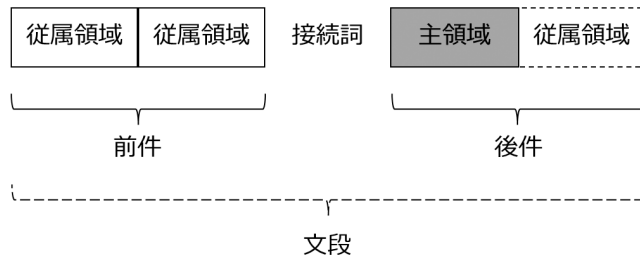


図 5 前後が非対称的な内部構造になる接続詞の主領域の位置と文段との関係

以上、前後の内部構造の対称性が高い並列・対比の接続詞は、接続領域が広い場合は段落冒頭で、接続領域が狭い場合は段落内部あるいは末尾で使用される傾向があり、前件と後件がそれぞれ文段として成立していると考えられること、また、前後の内部構造の対称性が低い順接・逆接・換言・結論の接続詞は、段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も接続領域が広くなりやすく、前件と後件を合わせた全体の領域が文段として成立していると考えられることを述べた。

## 5. まとめ

本稿は、人文科学論文で使用された接続詞を対象に、接続詞が形式段落内のどの位置で使われるかによって、接続詞が意味的に結びつける範囲の広さにどのような特徴があるかを分析した。その結果を RQ に沿ってまとめる。

RQ1 「接続詞の出現位置ごとの接続領域の広さにどのような特徴があるか」について、接続詞

に共通する基本的な特徴として、接続詞が段落冒頭で使用された場合のほうが段落内部や末尾で使用された場合よりも接続領域が広がる傾向があることを明らかにした。また、段落冒頭で使用された場合のみ前件の接続領域が広くなりやすい接続詞と、段落冒頭だけでなく段落末尾においても前件の接続領域が広くなりやすい接続詞があることがわかった。

RQ2「RQ1で得られた特徴と接続領域内の内部構造にどのような関係があるか」について、前後の内部構造の対称性が高い並列・対比の接続詞は、接続領域が広い場合は段落冒頭で、接続領域が狭い場合は段落内部あるいは末尾で使用される傾向があり、前件と後件がそれぞれ文段として成立していると考えられること、また、前後の内部構造の対称性が低い順接・逆接・換言・結論の接続詞は、段落冒頭だけでなく段落末尾で使用された場合も接続領域が広くなりやすく、前件と後件を合わせた全体の領域が文段として成立していると考えられることを述べた。

本稿では、認定結果の一致度が低い用例を対象から除外して分析を行った。今後は対象外となった用例が具体的にどのような用例なのかについても検討し、本稿の結果との関連についても明らかにしていきたい。

## 参考文献

- 井伊菜穂子 (2019) 「接続詞『また』の機能領域の広さと対称性—『さらに』『一方』と比較して—」『日本語学会 2019 年度秋季大会予稿集』 35-42.
- 井伊菜穂子 (2020) 「接続詞の接続領域の性質と認定基準」『一橋大学国際教育交流センター紀要』 2: 31-42.
- 石黒圭 (2001) 「換言を表す接続語について—『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に—」『日本語教育』 110: 32-41.
- 石黒圭 (2016) 『書きたいことがすらすら書ける！「接続詞」の技術』東京：実務教育出版.
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子 (2009) 「接続詞の機能領域について」『言語文化』 46: 79-94.
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』東京：教育出版.
- 尾崎誉治 (2022) 「説明的文章における接続表現の使用と段落構造」『国語学研究』 61: 104-118.
- 金岡孝 (1983) 「文章論の位置づけ」『日本語学』 2(2): 4-12.
- 佐久間まゆみ (1974) 「新聞社説における段落区分の形態的特質について」『國文』 40: 23-37.
- 佐久間まゆみ (1984) 「読み手の段落区分と文章の構造原理」月刊『言語』 13(3): 106-115.
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子 (2013) 「学術論文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—」『日本語教育』 154: 85-99.
- 砂川有里子 (2015) 「逆接の接続詞と談話構成力の習得—日本語学習者の縦断的な作文コーパスを活用して—」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 285-317. 東京：くろしお出版.
- 高城悠輔 (2019) 「説明的な文章教材における段落相互の関係に着目しながら、考えと事例との関係を捉える力を高める指導の工夫—3 年生「合図とするし」における、事例、指示語・接続語に着目した指導—」『教育実践研究』 29: 19-24.
- 塚原鉄雄 (1966) 「文章と段落」『人文研究』 17(2): 173-204.
- 塚原鉄雄 (1968) 「接続詞」『月刊文法』 1(1): 39-43.
- 塚原鉄雄 (1970) 「接続詞—その機能の特殊性—」『月刊文法』 2(12): 10-18.
- 董芸 (2020) 「日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得—中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通じて—」『国立国語研究所論集』 19: 127-138.
- 永野賢 (1969) 『悪文の自己判断と治療の実際』東京：至文堂.
- 永野賢 (1986) 『文章論総説—文法論的考察—』東京：朝倉書店.
- 名取真人 (2014) 「カイ二乗近似によるクラスカル・ウォリス検定と小標本」『霊長類研究』 30: 209-215.

**例文出典**

永井聖剛 (2015) 「異種混交体としての『です』調—山田美妙『白玉蘭 (別名壮士)』にみる「大衆文学」への水脈—」『日本近代文学』93(2): 1-15.

滑川恵理子 (2015) 「言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習—身近な大人との母語と日本語のやり取りから—」『日本語教育』160: 49-63.

堀川宗一郎 (2015) 「鎌倉時代における仮名文書の『とん』—固定的連綿—」『日本語の研究』11(4): 34-18.

## **Relationship between the Position and Scope of Conjunctions: Focusing on Conjunction Use in Humanities Papers**

II Nahoko

Graduate Student, Hitotsubashi University / Adjunct Researcher, Research Department, NINJAL

**Abstract**

This paper discusses the relationship between the position of conjunctions and the scope to which they are semantically linked, with a focus on conjunctions used in humanities papers. The analysis yielded the following three conclusions. First, the basic characteristic common to all conjunctions is that the scope tends to be wider when a conjunction is used at the beginning of formal paragraphs than inside them or at the end. Second, additive and contrastive conjunctions, which link the front and back in a symmetrical structure, tend to be used at the beginning of formal paragraphs when the scope is wide and at the end when the scope is narrow, indicating that the width of the scope is polarized according to the position of occurrence. Third, causal conjunctions, adversative conjunctions, paraphrasing conjunctions, and conjunctions of conclusion, which link the front and back in an asymmetrical structure, tend to have a wider scope when used at the beginning and at the end of formal paragraphs.

**Keywords:** connective expression, scope, formal paragraph, logical paragraph, internal structure